

中国古代儒家文献に見る反戦思想 (8) — 『晏子春秋』『戦国策』 —

Antiwar Thoughts in the Confucian classics(8)

: An Zi Chun Qiu (『晏子春秋』), Zhan Guo Ce (『戦国策』)

濱 川 栄

HAMAKAWA Sakae

(令和四年十月二十七日受理)

抄 録

前稿に続き『塩鉄論』に見える絶対平和主義の淵源を先行儒家文献に探る。本稿は『晏子春秋』『戦国策』を検討する。『晏子春秋』は墨家の書ともされるが、その反戦思想には墨家の影響は見られない。また他の儒家文献同様有徳者が悪を討つ戦争は許容しており、その「愛民」思想も直接反戦思想と関わるものではない。『戦国策』は前漢後期の劉向の編書であり、劉向・劉歆父子が『七略』(『漢書』芸文志の祖本)の六芸略に置いたが、反戦的言辞も儒家思想もわずかしか見えない。この書を六芸略に置いた理由を劉向自著の序録に探ると、遊説家の弁説を評価した点以上、秦の強勢に戦国乱世の責任を転嫁し、それに代わった漢王朝の正統性を説くためと解される。以上の検討から両書には絶対平和主義の主張はないと結論づけた。なお両書が前漢末に儒家文献と認識された事実から、当時の儒学と諸子思想との未分化が看取される。

キーワード：晏子、愛民、蘇秦、劉向、『戦国策』序録

はじめに

前七稿に引き続き、中国古代の儒家文献に見える反戦思想や反戦的言辭を抽出・検討する。その目的は前稿までと同様、前漢中期（前八一年）の「塩鉄会議」で民間の儒者たちである賢良・文学が唱えた「絶対平和主義」の思想的淵源を、それ以前に存在した儒家文献に見いだせるか検証することにある。本稿は『晏子春秋』と『戦国策』を対象とする。

この二書を儒家文献とみなしてよいのか、という疑問を持たれる向きも多いと思われる。今日の我々の常識からすれば、『晏子春秋』はまだしも、『戦国策』を儒家文献と見る人は恐らく皆無であろう。しかし、現存する中国最古の文献目録である『漢書』芸文志では、『晏子春秋』は諸子略・儒家者流の筆頭に挙げられており、『戦国策』はなんと正統的儒家經典を列挙した六芸略に位置づけられている。この点については五章で再検討するが、芸文志の祖本となった『七略』を劉歆父子が編纂した前漢後期（前一世紀後半—一世紀初）から『漢書』が成立した後漢初期（一世紀末）には『晏子春秋』も『戦国策』も儒家文献とみなす通念があったことは確かであろう。そもそも両書とも儒家官僚たる劉向が校訂して現行本の形に整え、子の劉歆が『七略』で儒家者流・六芸略に分類したのだから、当時の目からは儒家文献とみなされてははずである。本稿ではこうした前提に立ち、これら二書を分析対象とする。

一、晏子と『晏子春秋』について

『晏子春秋』は、春秋時代の齊の名宰相として名高い晏嬰（晏平仲。前六世紀前半—前六世紀末）と齊の三君主（靈公・莊公・景公）らとの問答の記録である。特に景公（位前五四七年—前四九〇年）とのやり取りが大部分を占めるが、私利私欲を無邪気に追い求める景公を晏子が逐一的を射た諫言で説得し、景公に反省を促す、という図式の問答が列挙されている。

晏子の名は『論語』『礼記』『孟子』『荀子』『韓詩外伝』『春秋左氏伝』『新書』など多くの儒家文献に見えるが、『莊子』『韓非子』など儒家と対立する他学派の文献にも見られ、その評価はおしなべて高い。『史記』仲尼弟子列伝には「孔子の嚴に事うる所は、（中略）齊に於ては晏平仲」とあり、晏子が孔子よりも年長で、孔子が私淑した人物だったことが推測される。『論語』公冶長篇にも「晏平仲は善く人と交わる。久しくして之れを敬う」とあり、孔子がその人柄を評価していることがうかがえる。

一方、晏子は『晏子春秋』外篇第八章第一章、第六章で孔子とその思想をさまざまな角度から批判している。したがって、晏子が孔子の唱えた儒家思想をそのまま信奉していたとは考え難い。ほぼ同時代を生きた孔子と晏子の関係は、晏子が優位に、孔子が劣位にあったと見られる。はるか後代、儒家思想が絶対化され、孔子が神格化されてからは『晏子春秋』外篇に見える晏子の姿勢は問題視されざるを得なかったが、存命中は晏子の方が孔子をはるかに凌駕する名声と評価を得ていたのであり、それは漢代以前の人々にはごく当たり前に受け入れられていたものと思われる。

『晏子春秋』の撰者は不明である。晏子没後を記した内容が同

書に見える以上、晏子の自著という説は当然成り立たない。少なくとも後人の手が加わっていることは間違いない。成立時期についても諸説あるが、おおむね戦国時代成書説が通説となっている。

ただし、劉向が現行本に整理する以前に複数の種類の『晏子春秋』があったことが劉向自身の叙録からわかる。一九七二年に山東省臨沂県銀雀山漢墓(前漢武帝期の前二世紀後半に比定)から出土した竹簡本『晏子春秋』は全十六章の完本であるが、章の配列は異なるものの内容は現行本と一致するものであった。ということと同様に現行本の他の一部をまとめて完本とした別種の『晏子春秋』もあったことが想像できる。以上の点から、前漢武帝期以前に各種の『晏子春秋』が存在したことは間違いないし、竹簡本『晏子春秋』が孔子を批判した外篇第八の数章をも含んでいる点から、前漢武帝期はもちろん劉向が校訂を終え成帝に献上した時点で、『晏子春秋』の非儒家的要素がさほど問題視されることはなく、孔子とその思想に批判的な意見が一律に排斥されるほどには孔子が神格化されていなかったことがわかる。

では、『晏子春秋』から看取される晏子の思想、政治的立場の要点はどのようなものであったのか。谷中信一は、晏子の思想に見える特徴を「愛民」「節儉」「礼」「合理思想」「尊賢」という語句で表している。このうち、反戦思想と最も深く関わるのは谷中が「第一に挙げるべき」とする「愛民」であろう。「愛民」を強く掲げる『晏子春秋』にはどのような反戦的言辞が見られるだろうか。

二、『晏子春秋』に見える反戦的言辞

現行『晏子春秋』は大きく内篇(第一〜第六)と外篇(第七〜第八)に分かれ、全二一五章の記事からなる。以下、順を追って反戦的言辞を抽出していきたい。

まず、内篇諫上第一の第一章、つまり冒頭の章から反戦的言辞が登場する。「勇力」を信奉する莊公(位前五三年―前五八年)が、昔も力だけで世に立つ者がいたのか、と問うと、晏子は以下のように答えた(以下、訓読に続く(一)は現代語訳)。

嬰、之れを聞く、死を軽んじて以て礼を行うは之れを勇と謂い、暴を誅して彊を避けざるは之れを力と謂う、と。故に勇力の立つや、以て其の礼義を行うなり。湯・武は兵を用うれども逆と為らず、国を并すれども貪と為らざるは、仁義の理なればなり。暴を誅して彊を避けず、罪を替きて衆を避けざるは、勇力の行いなり。

(私は、死を軽んじて礼を行うのが「勇」であり、乱暴者を懲らしめ強者にひるまないのが「力」である、と聞いています。勇力の者が世に立つのは、それをもって礼義を行う場合です。殷の湯王や周の武王が武力を用いて主君であった夏の桀王や殷の紂王を討つたことが反逆とはみなされず、他国を併合しても貪欲とみなされなかったのは、悪を討つという仁義にかかった行為だったからです。乱暴者を懲らしめ強者にひるまず、犯罪者を罰し多勢を恐れないうことこそ勇力にふさわしい行為なのです。)

晏子はさらに続ける。

古の勇力を為す者は、礼義を行うなり。今、上は仁義の理無く、下は罪を替き暴を誅するの行い無く、而して徒に勇力の

みを以て世に立つならば、則ち諸侯の之れを行うは以て国危うく、匹夫の之れを行うは以て家残せここなわれん。

〔上古に勇力を振るった者は、みな礼教や正義を行うためだったのです。ところが、今や上に仁義の道理はなく、下に罪人を罰し乱暴者を懲らしめることもないのに、勇力だけに頼って世に立とうとするなら、諸侯なら国を危うくし、匹夫なら家を損なうことでしょう。〕

晏子はこのように勇力に頼ることに懸念を示し、次いで、かつて聖王が建国したはずの夏も殷もやがて勇力を濫用する悪臣が跋扈はつごするようになって国勢が衰え滅んだことを説き、

今、公は自ら勇力を奮い、行義を顧みず、勇力の士は国に忌むこと無く、身は威強を立て、行いは淫暴を本とし、貴戚は善を薦めず、逼邇ひよじは過ちを引かず。聖王の徳に反き、滅君の行いに循したがう。此れを用いて存する者は、嬰、未だ有るを聞かざるなり、と。

〔今、君公は勇力を立てようとされていますが、その行いに義はなく、配下の勇力の士は国を慮ることもなく、居丈高な態度で淫乱・乱暴な行いに終始し、公族は進んで善を行おうとせず、近臣は君公の過失を諫めることもしていません。こうした状況は聖王の徳に背き、亡国の君主の振る舞いに準ずるものです。このような勇力の用い方をして生き延びた例があったとは私はいまだ聞いたことがありません。〕

この晏子の言は、質の悪い近臣や配下に多少責任を転嫁してはいるが、結局のところ莊公に勇力で天下に覇を唱える資格はない、それはそもそも正義を行う誠意がないからだ、と手厳しく莊公を

批判したものといえる。

勇力とは、端的に言って武力そのものであろう。晏子は、単純な武力のみによって天下を従えることはできない、それは殷の湯王や周の武王が夏の桀王・殷の紂王を滅ぼした時のように、あくまで悪逆無道を行う者を倒し、世界に正義をもたらす場合にのみ肯定される、と主張する。それは前稿までに見てきたように、多くの儒家文献に共通して見られる「正義を実践する聖王による戦争は肯定される」という思想と全く同じである。その意味では『晏子春秋』を儒家の文献とみなすことに何の問題もないであろう。

次に内篇諫上第一第二十二章を見てみよう。景公が宋を討とうとして軍を出し、泰山を過ぎた際に夢で二人の偉丈夫が激しく怒っている姿を見た。夢占い師に問うたところ、斉軍が泰山を祭らずに通過しようとしたことを泰山の神が怒って景公の夢に現れたのだからすぐに祭祀を行うように、とのこと。しかし晏子はその解釈を否定し、偉丈夫二人を殷の湯王とその宰相の伊尹であるとし、宋は史上に知られた聖人の湯王が建てた殷の末裔の国であるから、それを討とうとした景公に激怒しているのだ、ただちに軍を引き上げ宋と和睦するように、と勧めた。しかし景公はその言に従わず、宋に攻め込んだ。晏子は、

公、無罪の国を伐ちて以て明神を怒らし、行を易かえて以て蓄よしみを続つがず、師を進めて以て過ちに近づくは、嬰が知る所に非ざるなり。師若し果たして進まば、軍必ず殃わざわい有らん。

〔我が君は罪のない国である宋を攻めて神々を怒らせ、行いを改めて宋と良好な関係が続けることをされず、軍を進めて自ら過ちに近づかれましたが、それはもはや私の知ったことで

はありません。もしもこれ以上進撃されるのであれば、我が軍には必ずや災いがあるでしょう。」

と突き放した。それでも斉軍はさらに二日分の距離を進軍したが、結局將軍を失う大敗を喫したため、景公は晏子に詫び、軍を撤退させた。晏子の懸念どおり、宋攻略は失敗に終わったのである。

上古の聖王の遺徳を継ぐ国を攻めるのが不義であるなら、現在徳にもとづく政治をしている国を攻めるのはなおさらである。内篇問上第三章第一節では、今の世で天下を従えるのに必要なのは時勢か、と問う莊公に対し、「行いなり」と答えた晏子が、さらに莊公から「何をか行う」と問われ、次のように答えている。

能く邦内の民を愛する者は、能く境外の不善を服す。士民の死力を重んずる者は、能く暴国の邪逆を禁ず。賢者に聴質する者は、能く諸侯を威す。仁義に安んじて世を利するを樂しむ者は、能く天下を服す。

〔進んで国内の民を愛する者は、国外の不善を正し威服することができます。士民の懸命な努力を尊重する者は、暴虐な国の邪悪な行いを禁圧できます。賢者の助言を容れて任せられる者は、諸侯を従えられます。仁義の徳に身を委ね世の人々を利することを喜ぶ者は天下を保有できます。〕

しかし、続けて「邦内の民を愛すること能わざる者」「士民の死力を軽んずる者」「諫めに悔り賢を傲る者」「仁義に倍きて名実を貪る者」は天下はおろか自国の統治すらおぼつかないと述べ、天下を服する者は、此れ其の道なるのみ。

〔天下を威服したければ、「愛民」に始まり仁義に安んじ世を利するを樂しむに至る〕この道に則るしかないのです。〕

と断言する。

しかし莊公がその言を容れなかったため、晏子は職を辞し隠居した。その後、

公は勇力の士に任じて臣僕の死を軽んじ、兵を用うること休み無ければ、国罷れ民害わる。期年にして、百姓大いに乱れ、身に崔氏の禍を及ぼす。

〔莊公は軍隊の力を過信して臣下の死を意に介さず、休みなく戦争を行ったため、国は疲弊し民は損害を被った。一年ほどして人々が大反乱を起こし、莊公自身崔氏（崔杼）の禍に遭い殺されてしまった。〕

とあるように晏子の諫言を聞かなかった莊公は破滅への道を突き進んだのである。

問上第三章第二節にはその莊公が晋を討とうとして晏子と交わした問答が見える。

莊公、將に晋を伐たんとして晏子に問う。晏子対えて曰く、不可なり。君、得るもの合れども欲多く、欲を養いて意驕る。得るもの合りて欲多き者は危うく、欲を養いて意驕る者は困しむ。今、君、勇力の士に任じて以て明主を伐たんとす。若し濟らざれば、国の福なり。不徳にして功有れば、憂い必ず君に及ばん、と。

〔莊公が晋を討とうとして晏子に可否を問うた。晏子は「いけません。君公は得るものは十分得ておられながら欲深く、さらに欲を膨らませ、心は驕慢です。十分得ていながらさらに欲深き者は身が危うく、さらに欲を膨らませ心が驕慢な者は（どこまで行っても欲が満たされず）苦しみます。今、君公

は軍隊の力に任せて晋の明主を攻めようとされていますが、もしも失敗なされれば齊の国にとっては幸福です。徳もないのに成功すれば、憂患が必ず君公に及びましよう」と言った。」

晏子は莊公の能力も人柄も全く評価しておらず、その返答は現代人でも冷や冷やするほど手厳しい。それはさておき、ここで晏子が先ほどの諫上第二十二章で主張した「上古の聖王の末裔の国は攻めてはならない」というやや非現実的な理由ではなく、現に今「明主」(平公)の下でよく治まっている国だからという理由を挙げている点には注目したい。しかしもちろん、莊公は「色を^な作して説ばず」、この諫言を受け容れなかった。匙を投げた晏子が辞職し隠居している間に莊公は晋に攻め込み、緒戦は勝利を重ねたものの、一年後には民の離反を招き、崔杼に弑殺されたのである。

良治の国は攻めてはならないという晏子の主張は続く第三章でも展開される。景公が魯を討つことの可否を問うと晏子は、不可なり。魯君は義を好みて民之れを戴く。義を好む者は安んじ、戴かるる者は和す。(中略)故に攻むべからず。義を攻むる者は不祥、安きを危うくする者は必ず困しむ。且つ嬰之れを聞く、人を伐つ者は徳は以て其の国を安んずるに足り、政は以て其の民を和するに足る、と。国安んじ民和して、然る後に以て兵を挙げて暴を征つべし。今、君は酒を好みて辟を養い、徳は以て国を安んずること無く、藉斂を厚くし、使令を急にし、政は以て民を和すること無し。徳以て之れを安んずること無ければ則ち危うく、政以て之れを和すること無ければ則ち乱る。未だ危乱の理を免れずして、安和の国を伐

たとと欲するは、不可なり。徳を修めて其の乱を待つに若かざるなり。其の君乱れ、上其の下を怨み、然る後に之れを伐たば、則ち義厚くして利多からん。義厚ければ則ち敵寡く、利多ければ則ち民勤む。

(いけません。魯公は正義を好み、民はこれを奉戴しています。正義を好む者の地位は安定し、民に推し戴かれている者は民とよく和合しています。(中略)だから攻めてはいけません。正義を攻める者は不祥であり、地位が盤石な者を脅かそうとする者は必ず苦しみます。また、嬰は「他国を攻める者は、徳義がその国を安らかにするに十分であり、政治はその民と和合するに十分なものである」と聞いております。これはつまり、自国が安定し民と和合できる政治が実践できてこそ、初めて兵を挙げて暴虐な相手を討つことができるのです。ところが今、我が君(景公)は酒を好み、よこしまな者たちを養い、徳は国を安らげるに至らず、むやみに税を取りたて、拙速な命令を出している始末ですから、民を和らげる政治ができていません。徳が民を安らげられなければ(国は)危うく、政治が民を和らげられなければ(民は)乱れるでしょう。自国の状況が危険と混乱に陥る道筋から逃れられていないのに、安定し和らいでいる国を攻めようとするなど、もつてのほかです。まずは自国で徳を実践しながら、相手の国が(徳を失い)乱れるのを待つに越したことはありません。その国の君主が(徳を失って)乱れ、上位者たちが下位者たちを怨むようになるのを待ってから攻めれば、正義に厚く利益も多大な壮挙となります。正義に厚ければ敵は少なくな

り、利益が多ければ民は(戦争に)よく励むものです。」と長広舌を振るってその「不可」とする理由を説き、景公はその言を容れて魯討伐を断念した。

ここでも晏子は前章と同様「現に善政を行っている国は攻めてはならない」という原則を述べ、そもそも自国内で善政に程遠い政治しかできていない状態で善政の国を攻めるなど論外と断じ、どうしても他国を攻めなければまずはその国以上の善政を自国内で実践し、民と和合した安定した国を作り上げ、さらに相手の君主が徳を失い国が乱れるのを待ってから攻めるべきだ、と説いている。それは「聖王による正義の戦争だけが肯定される」という儒家文献に共通する理念に沿う考え方であり、やはり『晏子春秋』を儒家文献とみなし得る根拠になると思われる。

しかし、気になる点もある。善政を実現している国でも乱れてきたら攻めてよい、という主張にやや好戦的な匂いがする点である。ただしこれは、戦争に前のめりな景公を理想論だけで説得するのは困難と見た晏子が、あえて好戦的で計算高く聞こえる説法を駆使することで景公の熱気を冷まそうとした、とも解釈できる。そもそも国内で全く徳義が実践できていない景公が地道に自省を重ねながら自国よりはるかに善政を実現している他国の混乱を気長に待つなど、現実にはできるとは晏子も思っていなかったであろう。そうであるならば、この一見好戦的な意見は晏子の本心ではなく、景公を説得するための方便に過ぎないことになる。

しかし、単なる方便だったとしても他国が乱れてきたなら攻めてもよい、という言葉は、前稿までに見てきた儒家文献の各所に見えた顔回などの意見、すなわちあくまでも徳の実践によって世

の中を正し、安定させる、という理想論からは懸隔しているし、ましてや『塩鉄論』に見える賢良・文学の「絶対平和主義」とは大きく離れたものであると言えよう。

晏子の戦争観を考えるうえで見逃せない一章がもう一つある。問上第四章である。そこでは、景公が東夷の萊(萊)を討伐して勝利した際、褒賞をどうすべきかを問われた晏子が、「臣下の知謀で勝利したなら臣下の俸禄を増やし、民の尽力で勝ったのなら民を利するべきです」と答え、

故に上に羨獲有れば、下に加利有り、君上其の名を享くれば、臣下其の実を利す。故に智を用いる者は業を儉にせず、力を用いる者は苦を傷えず。此れ古の善く伐つ者なり。

〔ですから上に余りあるほどの戦果があれば、下にはそれに見合う利益が与えられ、君主が名声を享受すれば、臣下はそれに見合う実利を得るのです。そうであるからこそ(君主のために)智を働かせるものはその務めをおろそかにせず、体力を働かせる者はその労苦をいとわないのです。これこそ昔からの戦争上手のあり方です。〕

と返している。

しかし、実は晏子は「萊の夷維の人」(『史記』管晏列伝)であった。国はとうに斉に滅ぼされていたので、景公が討伐したのは萊の残党であつたらうか。ここで晏子は、同族が自分の君主の軍に討伐されたにもかかわらずその是非は一切問わず、戦争に貢献した者に厚く褒賞できる君主こそ「善く伐つ者」である、としている。『晏子春秋』の中で、晏子が戦争に言及しながらいささかも戦争に否定的・消極的な姿勢を示していないのは、唯一この章だ

けである。正義の戦争しか認めないはずの晏子がこうした態度である以上、今次の非はそもそも萊側にあったのかも知れない。しかし、景公が正義の戦争を取行したという気配も一切感じられない。背景が不明である以上これ以上の詮索はできないが、ここでは戦争の正当性を問う姿勢は見えず、戦争自体を否定する気配もない、ということと言える。晏子の戦争観が『塩鉄論』の賢良・文学のそれとは相当異なるものであったことは否めない。

それでも晏子が無用な戦争を極力避けるように君主に求めていることは、続く問上第五章からわかる。景公が他の諸侯を侮り、勇力を好み、庶民を軽視し、快樂を求め、欲望のままにふるまいたため、諸侯から悪評を買い、国民も親しまなかった。景公がそれを憂慮し、晏子に「上古の聖王の行いとはどのようなものだったか」と問うと、晏子は以下のように答えた。

其の行いは公正にして邪無し。故に讒人は入ることを得ず。阿党せず、色を私せず、故に群徒の卒、入ることを得ず。身を薄くして民を厚くす、故に聚斂の人、行うを得ず。大地の地を侵さず、小国の民を耗らさず、故に諸侯、皆其の尊からんことを欲す。人を劫すに甲兵を以てせず、人を威すに衆彊を以てせず、故に天下、皆其の彊からんことを欲す。徳行教訓は諸侯に加わり、慈愛利沢は百姓に加わる。故に海内、之れに帰すること流水の若し。

〔その行いは公正でよこしまな点がなかったため、人をそしめる者が付け入るすきはありませんでした。派閥を作ったり、女色にふけったりもしなかったので、徒党を組みたがる連中も付け入ることができませんでした。我が身の利益を薄くし民

の利益を厚くしたので、徴税人があくどいことを行う余地もありませんでした。大国の土地を侵略したり、小国の民を損耗したりもしなかったので、諸侯はみな彼が尊ばれ続けることを望みました。武力で人を脅かしたり、多勢をたのんで人を威圧することもしなかったため、天下はみな彼が強くあり続けることを望みました。その徳行や教訓は諸侯を感化し、慈愛や恩沢は庶民に行きわたりました。ですから、世の人々は水が低きに流れるがごとく全て彼に帰服したのです。〕

ここで述べている内容は他の儒家文献でも頻見する上古の聖王たちの善政ぶりで、取り立てて新味はないが、「大地の地を侵さず、小国の民を耗らさず」や「人を劫すに甲兵を以てせず、人を威すに衆彊を以てせず」は明確な反戦的言辞とみなせる。

晏子はこれに続けて「今、衰世に人に君たる者」、つまり景公がことごとく上古の聖王とは真逆の悪政を布いていると指摘し、そんな君主が尊ばれることや強勢であることを欲する者は誰も救わず、彼が敵に攻撃されても近親縁者に見捨てられても誰も救ってはくれない、と突き放す。「それならどうすればいいのか」と問う景公に晏子は以下のように答えている。

對えて曰く、請う、辞を卑くし幣を重くして、以て諸侯に説き、罪を軽くし功を省きて、以て百姓に謝せん。其れ可ならんか、と。

〔答えて言うには「どうか諸国に対しては言葉遣いを慎み手厚く贈り物をして対話に努め、国内の民に対しては刑罰を軽くし賦役を減らしてこれまでの悪政をわびて下さい。そうすれば少しは状況が好転するでしょう」とのこと。〕

ここまで言われて怒りを発しない君主などいそうにないのだが、なんと景公はこの晏子の言に素直に従ったのである。

公曰く、諾、と。是に于て辞を卑くし幣を重くして、諸侯附し、罪を軽くし功を省きて、百姓親しむ。故に小国入朝し、燕・魯共に貢す。

〔景公は「わかった」と言い、晏子の指示どおり言葉を慎み贈り物を手厚くしたところ諸侯が親しみ懐くようになり、国内では刑罰を軽くし賦役を減らしたところ、民が素直に従うようになった。その結果、小国が入朝するようになり、燕や魯がこぞって貢物をするようになった。〕

今日の世界の為政者ですらここまで「聞く力」を発揮した例はないであろう。残念ながら景公がこうした善政を長期にわたって維持したわけではなさそうだが、一時的とはいえ景公をここまで善導した晏子の政治手腕はやはり傑出していたと言えるだろう。

晏子が為政者の反戦的姿勢を称えた言辞にはこのほか、「天下を威さず」(内篇問上第三十一章)、「兵彊きも弱を劫さず」(内篇問下第四第八章)、「威彊を以て人の君に迫らず、衆彊を以て人の地を兼ねず、(中略)其の兵を用うるに、衆の為に患いを展く、故に民其の勞を疾まず」(内篇問下第四第十一章)といった例が見られ、逆に好戦的姿勢を批判した言辞には、「兵を好みて民を忘れ」(内篇問上第三第二十五章)といった例があるが、多くの民に死をもたらすことを理由に戦争に否定的な意見を述べているのは、内篇雜下第六第十六章に見える、

吾が君(景公)(中略)又師を興すを好み、民の死近し。其の力を弊らし、其の財を竭くし、其の死を近くすれば、下

の其の上を憎むこと甚だし。

〔君公は(中略)さらに軍事行動を好まれるため、民は死を身近に感じています。民の力を疲弊させ、民の財貨を使い果たし、さらに民を死にさらしているとなれば、下の者が上の者を憎む風潮はますます甚だしくなります。〕

という一例しか見られない。

ということは、谷中信一が、

彼は常に民衆が政治の犠牲となって飢え凍えることがないよう幾度も君主に働きかけた。

と称賛する晏子の「愛民」思想であるが、それは必ずしも絶対平和主義につながるものではなかった、ということになる。長雨による飢饉に苦しむ民を救うために国庫の穀物の開放を景公に三度訴えたが許されなかったため、ついに自家の穀物を民に振恤したのち景公に辞表を叩きつけ、ようやく景公に反省させて国を挙げた飢民救済策を実行させたり(内篇諫上第一第五章)、晋の大臣の叔向に「徳や行いはどのようであれば高く厚いとみなせるか、またどのようであれば低く賤しいとみなせるか」と問われて、

徳は民を愛するより高きは莫く、行いは民を樂しませるより厚きは莫し、(中略)徳は民を刻するおり下きは莫く、行いは民を害するより賤しきは莫きなり。

〔徳は民を愛するほど高尚なものはなく、行いは民を樂しませるより厚情なものはありません。(中略)徳は民を過酷に扱うより下等なものはなく、行いは民を侵害するよりあさましいものはありません。〕(内篇問下第四第二十二章)

と明言するように、常に「愛民」を唱え実践していた晏子である

が、災害と並び民を最も苦しめるはずの戦争を「愛民」にもとるという理由で直接的に否定するような言辞は、意外にも晏子の口からはごくわずかしか発せられていないのである。

その理由はわからない。推測をたくましくすれば、諸国間の争いが激しさを増していた春秋時代後期においては、いかに「愛民」を唱えようともはや戦争は避けがたい必要悪になっていたためか、あるいはそんな中でも斉は晋や楚と並ぶ大国であり、比較的に優位に戦争を進める場合が多かったため弱小国ほどは戦争の惨禍を被る機会が少なかったためか。ともかく、常に「愛民」を唱え、それを実現するべく凡俗な君主たちを叱咤激励し続け、さまざまな衰勢の兆候を見せていた斉をよく大国たらしめ続けた稀代の政治家・晏子の口から「絶対平和主義」の言辞が吐かれることはなかった、という事実は強調しておきたい。

なお、古来議論がかまびすしい「晏子は儒家か墨家か」という問題についても一言触れておこう。確かに『晏子春秋』の外篇第八章第一章（第七章は儒家思想の「厚葬」（豪華で手厚すぎる葬儀）や「久喪」（三年という長すぎる服喪期間）等の過度な儀礼主義）や孔子の尊大な性格を厳しく批判しており、特に第一章は『墨子』にほぼ同文が見えている等の点から、『晏子春秋』は墨家の書であると見る意見にも首肯できる面はある。

しかし、反戦思想という点に注目すれば、徹底して「非攻」を唱え「絶対平和主義」に傾斜していた墨家の主張と晏子のそれとはやはり大きく異なると言わざるを得ない。聖王による悪の討伐という形での戦争は決して否定しないという晏子の思想的立場は、極めて儒家に近いと断言し得る。

『晏子春秋』には晏子没後に儒家・墨家双方の学派が晏子に仮託して自派の主張を竄入させた疑いが十分にある。そうである以上、『晏子春秋』だけをいくら仔細に読み解いても「晏子は儒家か墨家か」という疑問は永遠に解けない。儒家・墨家に限らず、そもそも諸子百家の思想は交雑し混じり合う部分が多かった。晏子は孔子の先輩なのであり、孔子が儒家思想を確立するずっと以前から国政を切り盛りしていた実践的政治家であった。むしろ晏子の思想や政治手法を儒家が取り込んで、あたかも自派の創見のように主張したという可能性も考えられる。それはまた墨家にも十分あり得る。そう考えれば、晏子が儒家か墨家かという議論はほとんど不毛な論争ということになる。我々は、儒家思想が絶対的地位を確立しつつある前漢後期において儒者の劉向が諸本に分かれていた『晏子春秋』を収集・校訂し、反儒家的な内容も排除せずに一書とし、¹⁵子の劉歆が『七略』で儒家文献に分類した、という事実を素直に尊重すべきではないだろうか。

三、『戦国策』について

「はじめに」で触れたように、『戦国策』も前漢後期（成帝期、前一世紀後半）に劉向が校訂・整理したものである。その祖本となる複数の書籍が存在したことは、武帝期（位前一四一年―前八七年）に成立した『史記』の各所に『戦国策』とほぼ同文の記事があることからつとに明らかであった。加えて、前漢初期（前二世紀前半）造営の馬王堆漢墓から出土した帛書に戦国時代の遊説家の書簡や言行を記した全二七章の文書があり、『戦国縦横家書』

と名付けられた)、そのうち十一章は『戦国策』『史記』と重なるが、残りの十六章は伝世文献に見えない佚文であったことから、数多くの異本が早くから存在したことがいよいよ明白となった。

『戦国策』は、前五世紀前半から秦による統一(前二二一年)に至る約二五〇年間に戦国各国で外交政策を説いた遊説家たちの言行録である。特に後に従横家と呼ばれた蘇秦・張儀などの知謀を尽くした外交術を活写し、「隗より始めよ」等多くの諺や格言を生んだ一書でもある。また「戦国時代」という時代呼称の由来となったことは各社の高校世界史教科書にも特記されている。

現在の『戦国策』には二種のテキストがある。編目の順番と巻数が異なる姚氏本(姚宏が校刻した三十三巻本)と鮑氏本(鮑彪が校刻した十巻本)である。ともに十二世紀半ばの南宋時代に成立したものであるが、内容面では大きな異同はない。¹⁶ 本稿は鮑氏本を底本とする林秀一訳注の新釈漢文大系版¹⁷をテキストとするが、引用にあたっては姚氏本の巻数・章数も併記する。また、訓読・現代語訳は筆者の判断で適宜改変した部分がある。

四、『戦国策』に見える反戦的言辭

本稿の目的はあくまで反戦思想や反戦的言辭の抽出・分析にあるが、『戦国策』には殺伐とした戦乱の時代を反映してか露骨な好戦主義的主張も見られるので、そこにも触れておきたい。秦巻四七章(姚本秦策一・四一章)に秦・恵文王(位前三三七年―前三一年)に献策する蘇秦の言が見える。

蘇秦曰く、(中略)昔者、神農は補遂を伐ち、黄帝は涿鹿を

伐ちて蚩尤を禽にし、堯は驩兜を伐ち、舜は三苗を伐ち、禹は共工を伐ち、湯は有夏を伐ち、文王は崇を伐ち、武王は紂を伐ち、斉桓は戦いに任じて天下に覇たり。此れに由りて之れを觀れば、悪んぞ戦わざる者有らんや。

〔蘇秦が言った。(中略)「むかし、神農は補遂の国を伐ち、黄帝は涿鹿を伐ちて蚩尤を捕え、堯は驩兜を伐ち、舜は三苗を伐ち、禹は共工を伐ち、湯は夏の桀王を伐ち、文王は崇の国を伐ち、武王は殷の紂王を伐ち、斉の桓公は戦いを専らにして天下の覇者となりました。こうして歴史を振り返れば、戦争をせずに天下に君臨した者などいたでしょうか。」〕

蘇秦はここで、上古の聖王から春秋時代の斉の桓公(位前六八五年―前六四三年)まで、みな戦争に勝利することで天下を支配したのだ、と力説している。続けて、以後は諸侯間で盟約を重ね法令を整備したがかえって戦乱は増え、庶民は苦しむばかり、と説き、その結果、

是に於て乃ち文を廢して武に任じ、厚く死士を養い、甲を綴り兵を厲ぎ、勝ちを戰場に効す。

〔そこで、文治をあきらめて武力に訴えることとし、死を恐れぬ将兵をたくさん養成し、鏝を縫い整え武器を研ぎ澄まし、戰場で勝利を得ようとするようになりました。〕

と諸国が戦争至上主義に傾いていった状況を述べる。そして、今、天下を并せ、万乗を凌ぎ、敵国を誣し、海内を制し、元元を子とし、諸侯を臣とせんと欲せば、兵に非ずんば不可なり。

〔今日、天下を併呑し、万乗の軍を擁する大国を凌駕し、敵国

を屈服させ、海内を制圧し、庶民をあまねく自身の子のように支配し、諸侯を臣下にしたたいとお望みならば、軍事力に頼らない限り不可能です。』

と戦争による天下統一を勧めている。
しかし、こうした蘇秦の献策を恵文王は受け入れなかった。売り込みに失敗し困窮した蘇秦は秦を去っていったん故郷の洛陽に帰り、家族や周囲の軽蔑の目に耐えつつ必死に兵法などを学び、安んぞ人主に説きて其の金玉錦繡を出ださしめ、卿相の尊を奪ること能わざる者有らんや。

〔どうして君主を説き伏せて黄金財宝や錦の衣服を出させ、公卿・宰相の地位を勝ち取れないことがあるのか(必ず手に入れるぞ)〕

と意を固め、一年後にはどんな君主でも説得できるという自信を得た。そこで、燕王、ついで趙王に遊説して大いに気に入られ、趙の宰相に抜擢された。蘇秦は榮華を極めるとともに合従策(対秦諸国同盟)を実現し、秦の東方進出を抑止したのである。

革車百乘、錦繡千純、白璧百双、黄金万鎰、以て其の後に随え、従を約し横を散じ、以て強秦を抑う。故に蘇秦、趙に相たりて、関、通せず。

〔戦車は百乘、錦繡は千束、白璧は百対、黄金は万鎰、これらの装備や財宝を背後に従えるほどの身分に登り、諸侯に合従を約束させ、秦との連衡を解消させ、強大な秦を抑圧した。そのため、蘇秦が趙の宰相となってからは函谷関は不通となり、秦は東方に出られなくな)った。〕

『戦国策』はこうした蘇秦の活躍を次のように評価している。

此の時に当たりて、天下の大、万民の衆、王侯の威、謀臣の權、皆蘇秦の策に決せんと欲す。斗糧をも費やさず、未だ一兵をも煩わさず、未だ一士をも戦わしめず、未だ一弦をも絶たず、未だ一矢をも折らずして、諸侯相親しむこと、兄弟よりも賢る。夫れ賢人在りて天下服し、一人用いられて天下従う。故に曰く、政を式いて勇を式いせず、廊廟の内に式いて、四境の外に式いせず、と。

〔この時にはさしも広い天下、無数の万民、威勢を誇る王侯、権謀を弄する謀臣ともども、全てのごとを蘇秦の策にならって決しようとした。一斗の兵糧も費やさず、一人の兵卒も煩わせることなく、一人の将士も戦わせることなく、一本の弓の弦も切ることなく、一本の弓も折ることなくして、諸侯が親しみあうことが兄弟のそれに勝るような状態を蘇秦はもたらしたので。まさに賢人がしかるべき地位にいれば天下が治まり、しかるべき人が登用されれば天下が従うということである。だから世に、「政策を駆使して武力を駆使せず、朝廷の内で全てを解決し、国外で武力を用いたりしない」と賢者の政治を称えるのである。〕

つまり、一切軍事に頼らず言葉の力のみで合従を実現した点を激賞しているのである。この「評価」を誰が記したかは不明であるが、これ自体が反戦思想を示していることは明らかである。

しかし、先述のように蘇秦本人は元來戦争礼賛論者であり、秦の恵文王に献策が採用されていけば秦の東方への侵攻を積極的の後押ししたがることは疑いない。『戦国策』のここまでの記述を真に受けるとすれば、当時の遊説家の代表格と言ってもいい蘇

秦は、私利私欲を満たすためなら戦争でも平和でも節操なく主張できる人物だったと解せる。

しかし、『戦国策』には蘇秦の言が各所に見えるので一通り確認しておこう。まず趙巻二・三五章（姚本趙策二・二三〇章）に蘇秦が燕から趙に行き、初めて合従を献策した場面が見える。

蘇秦、燕より趙に之ゆき、始めて合従せんとし、趙王に説いて曰く、（中略）大王の為に計るに、民を安んじ事無きに若くは莫なし。請う庸もて為す有る無かれ。民を安んずるの本は、交わりを扱えらぶに在り。

〔蘇秦は燕から趙に赴き、初めて合従策を献策しようとし、趙王（肅侯）に言った。「（中略）大王のために凶りますに、民を安心させて事を荒立てないに越したことはございません。ぜひとも事をお荒立てなさいませんに。民を安心させる根本は、外国との交際の運び方にあります。〕

そして趙王に人払いをさせ、自分の献策を容れれば殷の湯王、周の武王、春秋時代の五覇が戦争を繰り返してようやく手に入れた土地も珍宝も手をこまねいたままで得られますと豪語し、趙・燕・斉・韓・魏・楚が同盟して秦に対抗する合従策を採るべきことを詳細に述べる。最強国であり、かつ諸侯を併呑する野心に満ちた秦を孤立させ、東方侵略を断念させられれば「民を安んずることができ、という理路は相手を説得するための手段であるとはいえ、反戦的言辞が一定の効力を果たすと期待された状況が戦国時代にもわずかにあったことをうかがわせる。

次に蘇秦と同族（弟？）と思しき「蘇子」が斉の閔王に長広舌を振るう斉巻一五八章（姚本齊策五・一五一章）を見よう。

まず、蘇子、斉の閔王に説いて曰く、臣聞く、兵を用いて天下に先立つを喜ぶ者は憂え、約結して怨うらみを主つかさどるを喜ぶ者は孤なり、と。

〔蘇子が斉の閔王に言った。「私はこう聞いております。『兵を用いて天下の諸侯の先に立つことを喜ぶ者は心配ことが尽きず、盟約を結んで（他国を討ち）怨うらみを買かうことを好む者は孤立する』と。〕

と武力や陰謀に頼って他国を制しようとする者がかえって心労を抱えたり孤立したりすると説き、軍事優先主義を批判する。また、臣聞く、善く国を為おさむる者は民の意いに順したがい、兵の能を料はかり、然る後に天下に従う、と。故に約して人の為に怨うらみを主つかさどらず、伐ちて人の為に強きを挫くかず。此かくの如くなれば、則ち兵費ついでえず、権か軽ろからず、地広む可べく、欲成す可きなり。

〔私は、『善く国を治める者は、民の心に従い、軍の能力を計り、それから天下平定の事業に従う』と聞いています。ですから、盟約して他人のことで怨うらみを買かわず、征伐して他人のことで強敵を挫くいたりしません。そのようであれば、兵力は消耗せず、権か威も軽ろんじられず、土地は手に入り、欲望は達成されるでしょう。〕

と「民の意」に従うために軍事行動や他国との同盟には慎重であるべきことを説く。また、

故に曰く、仁を祖とする者は王たり、義を立つる者は覇たり、兵を用いて窮むる者は亡ぶ、と。

〔そこでこのように言われます。『仁を大本とする者は王者となり、義を立てる者は覇者となり、軍を際限なく用いる者は

滅びる』と。』

と一見儒家的な価値観を説き、

戦いなる者は国の残にして、都県の費なり。残費已に先立ちて、而も能く諸侯を従える者は寡し。彼の戦いなる者の残為るや、上、戦いを聞けば、則ち私財を輸りて軍卒を富まし、飲食を輸りて死士を待ち、轅を折りて土に炊ぎ、牛を殺して土に觴ましむ。則ち是れ君を路らすの道なり。(中略) 則ち此れ中を虚しうするの計なり。(中略) 故に民の費やす所は、十年の田にして償わざるなり。

〔戦争というものは国の損害であり、都県の失費です。損害と失費が先行していながら、諸侯を従えることができた者はわずかです。戦争というものの損害のひどさと来たら、君主は戦いと聞けば私財を送って軍卒を富ませ、飲食を送って決死の兵士たちをもてなし、車の轅を折って燃やしてまで兵士のために炊飯し、牛を殺して兵士らに酒を飲ませます。これこそ君主を疲弊させる道であり、(中略) これこそ国中を貧乏にする計なのです。(中略) ですから民の失費の莫大なことは、十年間農耕に励んでも償いきれないほどです。〕

とする。さらに続けて春秋末に晋の智伯が威勢の絶頂で滅び、中山国が趙や燕に連戦連勝しながら結局滅んだのは、

戦攻を奮まざるの患いなり。此れに由りて之れを觀れば、則ち戦攻の敗れは、前事に見る可し。

〔戦い攻めることを自重しなかったための禍です。以上のように、戦い攻めることばかり優先すると失敗に陥ることは、こうした前例に照らせばご理解いただけるでしょう。〕

とし、勝ちに乗じて足元を掬われる危険性を強調する。そして、

臣聞く、戦いて大いに勝つ者は、其の士多く死して、兵益弱く、守りて抜く可からざる者は、其の百姓罷れて城郭露る、と。夫れ士は外に死し、民は内に残われ、城郭境に露るは、則ち王の楽しみに非ざるなり。(中略) 夫れ士を罷らし国を露して多く天下と仇と為るは、則ち明君は居らず、素しく強兵を用いて之れを弱むるは、則ち察相は事とせず。彼の明君察相なる者は、則ち五兵動かさざるとも諸侯従い、辞讓すれども重賂至る。

〔私はこう聞いております。『戦って大いに勝つ者は、その士が多く死んで兵力がどんどん弱くなり、守って攻め落とされぬ者は、その民は疲弊し城郭は破損して国境から城内が丸見えになる』と。このように兵士が国外で死に、民が国内で痛めつけられ、城郭が壊れて国境から場内が丸見えになるとは、王にとって楽しいことではありません。(中略) そもそも士を疲弊させ国内が見通されるようにしてまで多くの天下の諸侯と敵対することは、英明な君主ならば避けて近寄らず、いたずらに強兵を動員してこれを弱めることは、明察な相ならば避けて採らない策です。いわゆる明君・察相は(刀・劍・矛・戟・矢の)五つの武器を用いなくても諸侯が従い、へりくだって讓っても諸侯から丁重な贈り物が届けられるものです。〕

と説く。戦争は、むしろ有利に進めている時こそ危険なのであり、確実に国力を弱め、兵士や民を損ない、他国の怨みを買ひ、長久の利をもたらすものではない、というのである。

では蘇子が本当に主張したいことは何か。行論上では儒家的な徳治政治を唱える部分も見え、同章で「戦攻は先とする所に非ず（攻撃を優先してはならない）」、「攻戦の道は師に非ず（攻撃とは軍隊に頼るだけのものではない）」などと称してはいるが、ではその根拠として本章の後段で何を語っているかというところ、戦国時代初期に強勢を誇った魏（恵王）への対応に苦慮していた秦（孝公）のために商鞅が魏に使いし、美辞麗句で恵王をおだてあげて齊・楚に攻め込むようにそそのかし、まんまと敗戦に追い込んだ、という安っぽい外交術の事例でしかない。要するに、全て自分たち遊説の士に任せておけばよい、ということなのである。

蘇秦（及び蘇子）の弁論の本質は、次の逸話に表れている。宋衛中山卷四七四章18（姚本宋衛策四六八章）である。

宋、楚と兄弟けいぐわ為り。齊、宋を攻む。楚王、宋を救わんと言ふ。宋、因りて楚の重きを売りて、以て講を齊に求む。齊聴かず。蘇秦、宋の為に齊の相に謂いて曰く、之れを与して以て宋の楚の重きを齊に売るを明らかにせんには如かざるなり。楚怒り、必ず宋を絶ちて齊に事えん。齊・楚合すれば、則ち宋を攻むること易からん、と。

〔宋は楚と兄弟のように和親していた。そんな中、齊が宋を攻めた。楚王は宋を救援すると言った。そこで宋は、楚の強大さをかさに着て齊に講話を申し出た。しかし、齊は聞き入れない。そこで蘇秦が宋のために齊の宰相にこう言った。「宋の講話の申し出を聞き入れたうえで、宋が楚の強勢をかさに着て齊と講話しようとしたことを公表するのが一番でしょう。それを知れば楚は立腹し、宋と断交して齊に与すること

でしょう。齊と楚が同盟すれば、宋を攻めるなど簡単なことです」と。〕

ここでの蘇秦の目的は、「宋の為に」齊に停戦を促し軍を退かせることである。結果的にそれには成功している。しかし、そのためにわざと楚を怒らせ、宋と決裂させ、逆に齊と楚が結託して宋を攻めるようにそそのかす言辞を弄しているのである。目的のためには手段を選ばず、ということなのだろうが、これでは将来宋を今以上の窮地に追い込むことになってしまふ。もちろん、蘇秦には齊と楚という大同士がそう容易に手を組むことなどない、という計算があったのかもしれない。しかし、それを保証することは蘇秦といえどもできなかったはずである。万一本当に楚が宋を見限って齊と組み、宋に攻め込んだなら、宋が現状よりもはるかに深刻な事態に陥ることは自明であろう。それでは斉軍を撤退させるといふ当面の目的を果たしたとしても、宋には長期的に見て決して望ましい結果とは言えない。しかし、蘇秦は宋の先々の幸不幸など全く考慮していない。あくまで目先の「斉軍撤退」さえ実現できれば、後のことなど知ったことではないのである。蘇秦に限ったことではなく、『戦国策』に見える遊説家たちの言説は、ほぼ全編こうした短期利益の追求に終始しているのである。こうした文脈の中で語られる反戦的言辞や儒家的価値観は、しよせん方便の域を出ないものであると言わざるを得ない。

その点を踏まえつつ、続いて秦卷九十章（姚本秦策四・九四章）に見える楚の黄歇（後の春申君）の言を見てみよう。前二七九年から翌年にかけて、楚が秦の將軍・白起の猛攻を受けて遷都を余儀なくされる大敗を喫し、さらに白起の再攻が予測される危機的状

況に陥った際、黄歇は秦に派遣され、秦の昭襄王（位前三〇六年—前二五一年）に攻撃を断念させるべく説得を試みる。まず、

天下、秦・楚よりも強きは莫し。今聞く、大王、楚を伐たんと欲すと。此れ猶両虎相闘いて、驚犬、其の敵を受くるがごとし。楚を善みするに如かず。

〔天下に秦・楚より強い国はありません。今、聞くところによると、大王（昭襄王）はまたも楚を伐とうとされているとか。それは二頭の虎が闘って、駄犬に疲弊したところを見つけられるようなもの。楚とよしみを通じるに越したことはありません。〕

と結論を先に述べ、以下長々とその理由を並べるのであるが、その中でまず秦の強勢を褒めちぎりつつ、外交で韓・魏两国を分断し、なおかつ秦が韓に送り込んだ成橋が韓の宰相となって燕の秦への入朝も実現させたことに言及し、

是れ王、甲を用いず、威を伸べずして百里の地を出ださしむるなり。王は能と謂う可し。

〔このように王は武力を用いられず、他国を威したりもされずに百里の土地を供出させたのですから、王は大した能力の方と言えるでしょう。〕

と昭襄王が武力を用いずに韓や燕を手玉に取った外交を高く評価する。さらに続けて、

王若し能く功を持して威を守り、攻伐の心を省きて仁義の地五覇も六とするに足らざらん。王若し人徒の衆を負み、甲兵の強を恃んで、魏氏を毀るの威に乗じて力を以て天下の主を臣とせんと欲せば、臣、後患有らんことを恐る。

〔王がもしこれまでの成功を自覚して威厳を保ち、他国を攻め倒そうとする野心を捨てて仁義の精神を広め育み、以後の禍いの発生を予防されるならば、古の聖王たる三王も（王と併せて）四王とするに足らず、（春秋時代の斉の桓公、晋の文公ら）五覇も六覇とするに足らないでしょう。しかし、もし王が秦の人口の多さを頼み、軍隊の精強さをかさに着て、魏を破った威勢に乗じて武力でもって天下の諸侯を臣下にしようとなさるならば、私は後に禍いが生じるのではないかと危惧いたします。〕

と説き、武力に頼らずに「仁義」を広めるようにすれば三王五覇にも匹敵する名声を得られようが、今後とも武力一辺倒で他国を圧迫し続けるなら思わぬ禍いを被るだろうと主張する。この部分は十分に反戦的言辞とみなすことができる。

しかし、黄歇は続けて、楚を攻撃することはかえって韓や魏を強くすることになる、秦にとって本当の敵は遠方にある楚ではなく国境を接する韓・魏のはずだ、韓・魏は今でこそ秦と和睦しているが本心では積年の恨みを抱いている、とし、韓・魏が過去の秦との戦いで被った惨状を生々しく描写する。

本国残われ、社稷壊され、宗廟隳らる。腹を劓られ頤を折られ、首身分離し、骨を草沢に暴し、頭顱僵れ仆し、境に相望り。父子老弱、係虜せられて路に相隨い、鬼神狐祥して食む所無く、百姓、生を聊んぜず、族類離散し、流亡して臣妾と為りて、海内に満つ。韓・魏の亡びざるは、秦の社稷の憂いなり。今、王の楚を攻むるは、亦失ざらんや。

〔国都は損なわれ、国家は破壊され、宗廟は破られました。（韓・

魏の兵士たちは) 腹を裂かれ頸を折られ、首と胴体を切り離され、骸骨を草むらや沢のほとりにさらされ、頭蓋骨は倒れ伏し、国境から故郷を遠望しています。父子や老人・弱者は繋がれて道路を連行され、鬼神(死者の魂)は祀る人もなく落ち着き先もなく、人民は安心して暮らせず、親族縁者は離散し、流亡して誰かの奴隷になるしかない者が天下に満ちています。(それほど秦に痛めつけられ、秦を怨んでいる)韓・魏が滅んでいないことは、秦の国家を脅かす憂いの元です。今、王が楚を攻めようとするなど、失策も良いところですよ。」

一般に中国の史書に見える戦場の描写は至極淡白であり、このように惨状を詳述した例は珍しい。こうした描写をあえてすることで戦争への嫌悪感を醸成する意図があるやにも一見思われる。それならこうした叙述も反戦的言辞と見なせるであろう。しかし、ここでの黄歇の主張は、秦にかくも悲惨な目に遭わされ、怨み骨髄に達している韓・魏を放置して楚を攻めるなどんでもない、まず韓・魏を攻め滅ぼすべきだ、ということなので、実は反戦的どころか極めて好戦的な言辞ということになる。

このようにグロテスクな発言をしたうえで、黄歇は、
臣、王の為に慮るに、楚に善くするに若くは莫し。秦・楚合して一と為り、以て韓に臨まば、韓必ず首を授けん。(中略)
魏も亦関内の侯たらん。

〔私は王のためにこう考えます。楚と親密にされるに越したことはありません。秦と楚が手を結んで一つになり、そのうえで韓に迫れば、韓は必ずや首を差し出すでしょう。(中略) 魏も王の領内の一諸侯となりましょう。〕

と楚への攻撃を中止し楚と手を組めばたちどころに韓も魏も戦わずして従えられると力説し、さらに以下のように続ける。

王、一たび楚に善くせば、関内に二つの万乗の主あり、地を齊に注れば、齊の右壤は手を拱ぎて取る可きなり。是れ王の地、一に両海を經りて、天下を要絶するなり。是れ燕・趙は齊・楚無く、齊・楚は燕・趙無きなり。然る後、燕・趙を危動し、齊・楚を持せば、此の四国は痛みを待たずして服せん。

〔王が一たび楚と組めば、領内に(韓と魏の)二つの万乗の君主国を包摂することになり、領地が齊に接することになれば、齊の西側の土地は何もしないでも手に入れられましょう。そうなれば、王の領地は東西の極まりに届くとともに、天下を(真ん中の)腰の部分で分断することになります。それは、燕・趙に齊・楚の助けがなくなり、齊・楚に燕・趙の助けがなくなることを意味します。そのうえで燕・趙に圧力をかけ、齊・楚が離反しないようしかと掌握されれば、この四国(燕・趙・齊・楚)は、攻めて痛めつけるまでもなく秦に服従することでしょう。〕

とにかく眼前に迫る楚への再攻を中止させるべく、あの手この手で楚攻撃の不利益と楚と組む利益を並べ立てており、仁義や反戦思想を説いた部分はいかにも取ってつけた感が否めない。

『戦国策』はこの黄歇の言に対する昭襄王の反応を記しているが、『史記』春申君列伝によれば王はこの言を容れ、楚攻撃を中止している。黄歇の説得は成功したのである。しかし、その後の展開は黄歇が縷々述べたようにはならなかった。楚と結んだ秦が手をこまねいたままで燕・趙・齊を従える、などという状況は

実現しなかったのである。しかし、『戦国策』の各章はこうした事例の羅列である。各国の君主が、ともかく目先の利益、目先の危機の解消しか求めておらず、遊説家たちはその期待に応えることだけに注力し、延々と言辞を駆使して相手の欲心を買おうとする。「我が国を攻めるより、むしろ我が国と結んでA国・B国を攻める方が得策です。必ずやA国・B国は君王の掌中に収まるでしょう」といった類の、少し冷静に見れば何の根拠もない空論を展開し、相手を当面納得させて喫緊の目的だけ達成できればそれでよし、後で自身の発言と矛盾する事態が発生してもそんなことは歯牙にもかけない。²⁰『戦国策』に書かれた内容が現実を忠実に反映しているとするならば、戦国時代とは諸国がほとんど行き当たりばったり目先の利益だけに駆られて戦争を行い、殺し合いをした時代、と見なさざるを得ない。そこに時々見えるわずかながりの反戦思想、反戦的言辞も、しょせんは眼前の相手を幻惑し、だますための道具の一つに過ぎなかったのである。

『戦国策』に見える反戦的言辞は、以上である。²¹五〇〇章弱に及ぶ膨大な書物にしては、その数の少なさは驚くほどである。

五、『戦国策』が儒家文献とされた背景

このように殺伐とした内容の『戦国策』をなぜ『漢書』芸文志は儒家の経典として六芸略に置いたのだろうか。戸川芳郎は、

『戦国策』一書は、内容のうえからは(中略)「諸子略」從横家者に属すべき

としながらも『春秋左氏伝』や『史記』と同様に、

「空言」の口説、の書ではなくて、「本事」の存する事実の伝記であつたゆえに、他書から分離して春秋家に移し配せられた

としている。²²岩本憲司もそれを受けて『戦国策』を『春秋』と並列し得る「事」の書、つまり歴史事実を記した史話・説話集としている。²³一方、古くはマスペロが『戦国策』や『史記』に見える蘇秦の話に年代や内容の矛盾が多々あることから「蘇秦的小説」と評して蘇秦の實在すら否定しており、最近でも『戦国策』を史書とは認めない意見がある。²⁵秋山陽一郎も、

《戦国策》を戦国時代の各国の記録——すなわち一次史料とみなすか、縦横家の説話——すなわち二次史料(もしくは説得文芸作品)とみなすかの問題は、『史記』の戦国記事の史料の信頼性にも直結する重大な問題であるが、結論から言ってしまうえば、筆者はこれを二次史料である説話と見なしている。²⁶

とつれない。

しかし、現代人の我々がどんなに違和感を抱いたとしても前漢後期〜後漢前期の劉向・劉歆・班固が『戦国策』を『春秋』と『史記』の間をつなぐ重要な史書であり、かつ儒家経典に列するにふさわしい権威ある書物とみなしたことは否定できない。

では、いったいなぜ彼らは『戦国策』を六芸略に置いたのか。もちろん、そこに見える遊説家たちの言説をおおむね事実とみなしたからであることは疑いないであろう。しかし、仔細に見れば、劉向が整理した『戦国策』のみならず、司馬遷が見て『史記』に引用した諸書にせよ、馬王堆帛書『戦国縦横家書』の祖本にせよ、

相互に看過したい矛盾や誤謬があることにすぐ気づいたはずである。例えば『戦国縦横家書』を見る限り蘇秦はその活動時期が張儀より下る前三世紀前半の人物ということになり、張儀に先んじて前四世紀後半に活躍したとする『史記』の記述とは大きく食い違う。劉向は『史記』に寄せる形で『戦国策』をまとめているが、こうした多種多様な文献が存在したということ自体が、そのまま戦国時代の政治的・社会的混乱や不安定さを反映していると思われることができるのではないだろうか。

その混乱ぶりや不安定さは、劉向校訂後の『戦国策』からも十分看取される。例えば、燕巻四五六章（姚本燕策四四二章）に見える次のやり取りである。蘇代が燕の昭王（位前三二二年―前二七九年）に、「私が曾参・孝己のような孝行者で、尾生高のように約束を守り、鮑焦・史鱗のように廉潔な人間であって王にお仕えするとしたらいかがでしょうか」と問いかけ、王が「それは申し分ない」と答えたところ、それなら王に仕えるつもりはない、と返し、理由を問う王に対し次のように答えた。

孝なること曾参・孝己の如きは、則ち其の親を養うに過ぎざるのみ。信なること尾生高の如きは、則ち人を欺かざるに過ぎざるのみ。廉なること鮑焦・史鱗の如きは、則ち人の財を竊まざるに過ぎざるのみ。今、臣は進取を為す者なり。臣以爲らる、廉は身と俱に達せず、義は生と俱に立たず、仁義なる者は自ら完うするの道なり、進取の術に非ざればなり。

〔曾参・孝己のような親孝行といっても、それはただ自分の親を養うだけのこと。尾生高のように信用にあついても、それはただ人を欺かないだけのこと。廉潔さが鮑焦・史鱗の

ようだといっても、ただ人の財物を盗まないだけのこと。しかし今を生きる私は進取を心掛けております。私が思うに、廉潔は我が身の栄達と両立せず、信義にあつことは生き抜くことと両立せず、仁義はせいぜい自身の命を全うするだけのことで、進取の術ではないから私は採らないのです。〕
そこで昭王が「自分の人生の全うを心配するだけでは不十分なのか」と問うと、蘇代は次のように答えた。

自ら憂うるを以て足れりと為さば、則ち秦は殺塞を出でず、齊は營丘を出でず、楚は疏章を出でざらん。三王、位を代え、五伯、政を改めたるは、皆自ら憂えざるを以ての故なり。若し自ら憂いて足らば、則ち臣も亦、周の籠を負うもののみ。何為れぞ大王の廷を煩さんや（後略）。

〔自分のことをあれこれ考えるだけで十分なら、秦は殺の要塞から外に進出せず、齊は營丘から外へ進出せず、楚は疏章から外へ進出しなかったでしょう。三王が代わるがわる王位に立ち、五伯（覇）がそれぞれ政治を改革したのは、みな自分の身の上だけを考えたのではないからこそ。もし自分の身の上だけ心配していれば足りるのなら、かく言う私も故郷の周で籠を背負って野良仕事をするのみ。どうしてわざわざ大王様の宮廷にやってきてお手間をとらせましようや。〕

つまり、孝行・信義・仁義だのせいぜい我が身の修養に資するだけで、突き詰め過ぎるとかえって我が身を滅ぼすことにもなりかねない。自分はその価値観には縛られず「進取」、つまりもっと大きな利益を他者に先んじて得たいのだ、というのである。そして、それは従来の国境を守るだけに甘んじず、積極的に他国を

討って領土を広げてきた戦国諸国の野望と合致するのだという。

こうした利益第一主義、しかも現状に甘んじず欲望を肥大化させることを肯定する価値観が、反戦思想はもちろぬ儒家的価値観からも縁遠いものであることは言うまでもない。趙を中心とした合従への対応に悩む秦の昭襄王に相国の范雎が、普段はおとなしく王の周囲にはべっている犬たちの群れに一本の骨を投げ込めばたちまちそれを求めて争い出すという例えを説き、趙に集まった遊説家たちに賄賂をばらまいてたちまち合従を崩壊させた例(秦卷一〇一章、姚本秦策三・八一章)からもわかるように、『戦国策』に横溢しているのは乱世に乗じて一躍榮華を手に入れようという哀れにすら思える人々の欲望の発現である。春秋三伝に見えたような君子の論評、つまり「義」はほとんどないまま、ただひたすらに遊説家たちの弁舌とそれに踊らされる各国の右往左往を「事」とみなして書き記した一書が『戦国策』なのである。

劉向は『戦国策』序録31の末尾で戦国の遊説家たちを、

皆高才秀士にして、時君の能く行う所を度り、奇策異智を出だし、危を転じて安と為し、亡を運らして存と為す。亦喜ぶ可く、皆観る可し。

〔みな才能が高く優秀な士で、仕えた君主の能力と実行力をよく見極めて奇策や機知を練り出し、危機を一転させて安心をもたらし、滅亡に瀕した状態を挽回して存命させた。その言行はやはり喜ぶべきであり、みなが見て学ぶべきである。〕

と評価している。一見するとこれこそが『戦国策』をまとめた理由であり、また六芸略に列した理由であるようにも思える。しかし、ここに至るまでの序録の文章を見てみると必ずしも劉向の本

意はそこにはなかったのではないかとも思われる。

劉向は序録を通じて、春秋時代以後の社会情勢を次のように概括している。春秋時代の後半以後、鄭の子産や齊の晏子のような「衆の賢にして国を輔くる者」がいなくなり、「礼儀衰う」事態になった。さらに「仲尼既に没せしの後」、「道德大いに廃れ、上下序を失う」惨状を来した。そして「秦の孝公に至り、礼讓を捐て戦争を貴び、仁義を棄て詐譎を用い、苟も以て強を取るのみ」となり、商鞅を登用して富国強兵策に乗り出した秦の孝公(位前三六一年―前三三八年)が戦争を貴び仁義を棄てる画期を作ったことを強調する。そして劉向はこれ以降「詐譎の国、兵を興して強と為」り、「遂に相吞滅し、大を并せて小を兼ね、暴師歳を経、流血野に滿ち」、まさに「尽く戦国と為」った状況を歎ずる。そして「貪饕して恥無」き状態となり、「故に孟子・孫卿・儒術の士、世を棄捐し、而して游説権謀の徒、俗に貴しとせらる」、つまり孟子や荀子など儒学の士の活動が衰え、一方遊説家たちが一躍脚光を浴びるようになったとする。要するに、世の中から恥の概念が失われ、儒家的道德が顧みられなくなり、我欲を追求する遊説家たちが跋扈し始めたのも、全ては秦の強大化に原因があったとされているのである。そして「此の時に当たり、秦国最も雄にして、諸侯方に弱なれども、蘇秦の従を結べしの時、六国は一と為り、以て秦に償背す。秦人恐懼し、敢て兵を関東に闕わず、天下の兵を交えざる者二十有九年」と蘇秦が合従を実現し三十年近くにわたって秦の東方侵攻を阻止したことを高く評価する。しかし、「然れども秦国の勢い便にして利を形すや、権謀の士、威先んじて之れに馳す」と合従が崩れて策士たちが我れ先に連衡策に走った状

況を嘆いている。その後、ついに天下を統一した秦は「道徳の教、仁義の化無く」、「刑罰に任じて以て治と為し、小術を信じて以て道と為し、遂に詩書を燔燒き、儒士を坑殺し、上は堯舜を小り、下は三王を遯る」という悪政を布いたため統一後わずか十五年で滅んだわけだが、劉向は「秦の敗るるや、亦宜ならざらんや」とそれを当然の帰結とする。このように劉向は、戦国の世を決定的に乱れさせたのは秦の強大化であり、秦こそが諸悪の根源であるのだからその滅亡は必然であると主張しているのである。そうした見方は、当然劉歆、そして班固も共有していたことであろう。

もちろんそれは前漢後半期の儒学一尊の風潮が強まる時代にあつて陳腐とさえ言える常識的理解なのであるが、その認識が強くなったからこそ一見儒家的言説や反戦的言辭がほとんど見えないう『戦国策』を経書と同様に扱い六芸略に置くことにしたのでないか。秦の強大化により戦乱とあらゆる不正義がはびこった戦国時代の醜悪さを同書によって知れば知るほど、その後の秦の統一時代の救いのなさがより際立ち、さらにその後の秦の滅亡と漢王朝の勃興の正当性がより確実に理解される、そのような意図から『戦国策』は六芸略に列されたのではないだろうか。

おわりに

本稿の内容を簡単にまとめておこう。

まず『晏子春秋』について。儒家的要素とともに墨家的要素も色濃く含み、今日でもその思想的位置づけについて議論がある同書であるが、こと反戦思想について見る限りは諸子百家の中で最

も先鋭的なはずの墨家の影響はほとんど見受けられない。『晏子春秋』の中で語られる反戦的言辭は、戦争は有徳の君主にのみ許された行為であり、徳を著しく欠いた春秋時代後期の斉の君主たち(莊公・景公)には基本的に戦争をする資格などはない、という主旨の言説が際立つ。また、晏子の政治姿勢の最大の特徴である「諫」はその反戦的言辭の中でもいかになく發揮されているが、もう一つの特徴である「愛民」と反戦的言辭は意外にもほとんど関わりが見られない。それは有徳の君主による場合にのみ許されるといふ強い縛りがあるとはいえず、戦争そのものを晏子が否定してはいないところから来るものである。その意味で『晏子春秋』は塩鉄会議で絶対平和主義にまで踏み込んだ賢良・文学らの主張に直接的に関わる文献ではなかったと言える。³³

次に『戦国策』について。『晏子春秋』同様前漢後期に劉向によって校訂・整理され成立した『戦国策』は、『春秋』を継ぐ史書として劉向・劉歆父子により『七略』(後に班固が『漢書』に芸文志として収載)の六芸略に列せられたが、そこに見える反戦的言辭は蘇秦や黄歇(春申君)の長い言説の中のいくつかだけである。従って、本書も塩鉄会議で賢良・文学が唱えた絶対平和主義に関わる文献とはみなせない。³³しかし、そもそも儒家的言辭自体が極めて少ないこの書がなぜ儒家經典として六芸略に置かれたのか。劉向の手になる『戦国策』序録を読む限り、それは遊説家の弁説に汲むべきものがあるという理由より、秦の強大化に戦国時代の戦乱の激化と道徳的退廃の責任の全てを負わせるべきだという歴史認識を定着させ、秦の滅亡を受けて成立した漢王朝の正統性を際立たせるためであったと推測される。

今日『晏子春秋』『戦国策』を純然たる儒家文献と見る人はいない。しかし、この両書が前漢後期から後漢前期にかけてまことなき儒家文献として『漢書』芸文志に明記されたという事実から、我々は当時の儒学がまだ諸子百家の他学派の思想や主張と混じり合った状態にあり、当時の人々にとってはそれがごく当然のことであったということは理解すべきであろう。

注

1 以下の拙稿は煩を避けるために本文中でAとGの符号で示す。

A 「中国古代儒家文献に見る反戦思想(1)——『易経』『書経』『礼記』『論語』——」

B 「中国古代儒家文献に見る反戦思想(2)——『儀礼』『大戴礼記』『周礼』『詩経』——」

C 「中国古代儒家文献に見る反戦思想(3)——『孟子』『荀子』——」

D 「中国古代儒家文献に見る反戦思想(4)——『春秋公羊伝』『春秋穀梁伝』『春秋左氏伝』——」

E 「中国古代儒家文献に見る反戦思想(5)——『新語』『新書』——」

F 「中国古代儒家文献に見る反戦思想(6)——『孝経』『国語』——」

G 「中国古代儒家文献に見る反戦思想(7)——『韓詩外伝』『春秋繁露』——」

2 拙稿『塩鉄論』に見る反戦思想(『常葉大学教育学部紀要』三、五、二〇一五年)。

3 『漢書』芸文志に見える書名は「晏子」であるが、『隋書』以後の歴史正史の図書目録では全て『晏子春秋』となっている。『史記』管晏列伝にも「晏子春秋」とあるので、『漢書』芸文志に見える「晏子」が別の書物である可能性は低い。谷中信一は「書名の違いは内容とは何の関係もないとみるのが妥当であろう」(『訳注『晏子春秋』上、解題「四『晏子春秋』のテキスト」、明治書院、二〇〇〇年)としている。

4 劉向は自身が校訂・整理した書籍に詳細な解題を施し、それを集めた『別録』を作成していたが、完成を見ずに亡くなった。そこで、子の劉歆がその事業を引き継ぎつつ、劉向が果たせなかった書籍の学派・内容別の分類を行い、『七略』を成した。班固はその『七略』にさらに加除を施し、芸文志として『漢書』に収載したのである。以上、『別録』・『七略』・芸文志の成立過程については鈴木由次郎『漢書芸文志』(中国古典新書、明德出版、一九六八年)の「解説」参照。

5 外篇の厳しい孔子・儒家批判が墨家の主張と近似していたため、『晏子春秋』を墨家の書とみなす見解がとくに唐・柳宗元以来何度か唱えられている。しかし、劉向がそうした後代から見た非儒家的要素も含めて『晏子春秋』を現行の形に校訂し、儒家者

- 流に分類したことに少なくとも当時の人々が違和感を持つことはなかったのである。
- 6 劉向は成帝即位（前三三年）後、名を「更生」から「向」に改めている（『漢書』楚元王伝劉向伝）。『晏子春秋』の叙録に「臣向」とあることから、同書が成帝期に完成したことは疑いない。
- 7 前掲注3 訳注解題「三 晏子の思想とその思想史的位置」。
- 8 本稿は『晏子春秋』のテキストとして前掲注3 谷中訳注『晏子春秋』上及び同下（明治書院、二〇〇一年）を使用する。銀雀山漢簡『晏子春秋』も含めた多くの版本を参照して丁寧に校訂した訳注であり、現在最も信頼できるテキストと思われるからである。ただし、訓読や通釈は筆者が適宜改めた部分もある。
- 9 崔杼による莊公弑殺については『春秋左氏伝』襄公二五年（前五四八）年に詳しい。
- 10 莊公による普への侵攻は『春秋左氏伝』襄公三三年（前五五〇年）に詳しい。
- 11 魯討伐が未遂に終わっているため、この章に見える魯君が誰かは判じ難いが、恐らく晩年の襄公（位前五七二年—前五四七年）かと思われる。
- 12 しかもそれは晏子の父・晏弱が率いた斉軍によって滅ぼされたのであった（前五六七年）。
- 13 これは晏子が呉に使いし、呉王（闔閭らしい）に説いた発言。呉王は「忿然として色を作し、説はず」という反応を示した。
- 14 前掲注7 訳注解題三。
- 15 ただし劉向は『晏子春秋』の叙録で「凡て八篇、其の六篇は常に旁らに置きて御観すべし」とし、成帝に内篇六篇のみを熟読するように勧めている。しかし劉向校訂本には先に先立つ銀雀山漢簡『晏子春秋』が劉向本のような内篇・外篇の区別をせずに章を混交させている事実からは、少なくとも銀雀山漢墓造成の下限期とされる武帝期（前漢中期）以前にあっては儒家批判の部分も含めて晏子の思想として違和感なく受容されていたものと考えられる。
- 16 姚本と鮑本のどちらが本来の劉向本の篇序に近いかについては現在も論争がある。藤田勝久は鮑本を評価する（『戦国策』の性格に関する一試論「馬王堆帛書『戦国縦横家書』の構成と性格」、ともに同氏『史記戦国史料の研究』東京大学出版会、一九九七年所集）が、吉本道雅や秋山陽一郎は姚本の方が劉向本の原貌に近いとする（吉本道雅書評「藤田勝久著『史記戦国史料の研究』」『東洋史研究』五五六、一九九八年、秋山陽一郎「劉向本戦国策の文献学的研究—二劉校書研究序説』第三章「姚本戦国策考」、朋友書店、二〇一八年）。
- 17 林秀一『戦国策』上・中・下（明治書院、一九七七年・一九八一年・一九八八年）。
- 18 鮑本はこの章を宋・景公の代に配置しているが、在位年が前五七一年—前四九九年の景公と蘇秦の生存時期が重なるはずはない。別成君（位前三五六年—前三二九年）か次の康王（位前三二九年—前二八六年）の代のことと思われる。
- 19 『史記』春申君列伝。
- 20 林秀一が「懇請の結果が、どう落着いたかは、ここには示されていない。策の文には、この類がすこぶる多い。」（新釈漢文大系『戦国策』中、明治書院、一九八一年、六七二頁「余説」と

するように、『戦国策』に見える遊説家の進言・懇請が相手に受容されたかどうかさえ不明な例が非常に多い。

- 21 『戦国策』秦卷一〇八章（姚本秦策三・八五章）の「万物各得其所、生命寿長、終其年而不夭傷（万物各おの其の所を得、生命寿長し、其の年を終えて夭傷せず）」という蔡沢の言は直接的な反戦的言辞ではないが、前掲注1拙稿E以来注目してきた賈誼『新書』所引の髮子の言に近い。ただしこれは遊説家の蔡沢が秦に入って相国の范雎に取って代わろうと目論み、范雎に論争を挑んだ際に范雎には到底実現できない理想政治を述べた文の一部であり、ためにする空論であることは明らかである。

- 22 「偶談の余」(3)、二七頁（『漢文教室』一〇八号、大修館書店、一九七一年）。

- 23 岩本憲司「義から事へ」「義」から「事」へ―春秋学小史―』汲古書院、二〇一七年）。

- 24 馬司帛洛（Henri Maspero）著・馮承鈞訳「蘇秦の小説」（『国立北平図書館刊』七―六、一九三三年）。

- 25 何晋『戦国策研究』（北京大学出版社、二〇〇一年）など。

- 26 前掲注16秋山著書六頁―七頁。

- 27 『戦国縦横家書』第一章～第十四章等。佐藤武敏監修、工藤元男・早苗良雄・藤田勝久訳注『戦国縦横家書』（朋友書店、一九九三年）五六頁―五七頁参照。

- 28 『史記』蘇秦列伝によれば蘇秦は前三二〇年頃に斉の市場で処刑されたことになっている。

- 29 『戦国策』序録に「蘇秦初欲横、秦弗用、故東合従。及蘇秦死後、張儀連横、諸侯聽之」と明記するように、蘇秦が最初秦に連衡

を説いたものの容れられなかったため東方六国に合従を説いて秦に対抗し、蘇秦の死後に張儀が各国に連衡を説いて合従を崩壊させたとする『史記』蘇秦列伝と同じ時系列を採っている。

- 30 蘇代が例に挙げた尾生高（尾生）は橋の下で会うという女子との逢引きの約束を守り抜いた筈句、増水した川で溺死したことで知られる（『莊子』盗跖、『史記』蘇秦列伝等）。

- 31 『序録』は諸祖歌『戦国策集注彙考』（江蘇古籍出版社、一九八五年）所載のテキストに拠った。

- 32 『塩鉄論』で晏子の名は三か所に見えるが（殊路・頌賢・論誹）、『晏子春秋』の文の引用は論誹篇で丞相史が儒家の主張を批判するために外篇第八章を引いた部分に限られる。

- 33 『塩鉄論』に引かれた戦国時代に関する記事はほぼ『史記』のそれと思われる。『戦国策』にしか見えない記述が引かれているのは『塩鉄論』險固に引かれた「阿・甄」という地名程度しかない（秦卷八三章、姚本秦策三・七二章）。